

盲田遺跡

—県営経営体育城基盤整備事業（富島地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2015

新潟県長岡市教育委員会

例　言

1. 本書は、新潟県長岡市富島町地内に所在する盲田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、県営経営体育成基盤整備事業（富島地区）に伴うものであり、平成 17・18 年度に長岡市教育委員会が確認調査を行い、本発掘調査は平成 25 年度に、長岡市が新潟県長岡地域振興局から委託を受けて実施した。
3. 確認調査に要した費用は文化財保護部局である長岡市教育委員会が負担し、国庫及び県費の補助交付金を受けた。本発掘調査に要した費用は、原因者である新潟県長岡地域振興局が費用の 95%を負担した。また、長岡市が費用の 5%を負担し、国庫及び県費の補助交付金を受けた。
4. 遺物の注記は、「MKD」の後、出土位置、取り上げ番号等を記した。
5. 本書の執筆・編集はすべて調査担当が行った。「第V章　自然科学分析」については、パリノ・サーヴェイ株式会社が行った自然科学分析の報告書を調査担当が抜粋・編集した。
6. 調査・整理体制は以下のとおりである。

平成 25 年度　本発掘調査

調査主体　長岡市教育委員会（教育長　加藤孝博）

事務局　長岡市教育委員会科学博物館（館長　山屋茂人）

調査担当　長岡市教育委員会科学博物館　主査　鳥居美栄

現場代理人　須佐享二（株式会社吉田建設）

平成 26 年度　整理作業

調査主体　長岡市教育委員会（教育長　加藤孝博）

事務局　長岡市教育委員会科学博物館（館長　小熊博史）

整理担当　長岡市教育委員会科学博物館　主査　鳥居美栄

調査補助員　桜井美由貴（株式会社吉田建設）

7. 発掘調査で出土した遺物及び、測量図面・写真等の記録類は、長岡市教育委員会で保管している。

8. 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の方々より多大なるご教示・ご協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。（五十音順・敬称略）

竹部佑介　松井智

富島地区園場整備協議会　富島町町内会

図版凡例

1. 遺物実測図（図版 7～11）におけるスクリーントーンは以下のものを示す。

 墓書（文字・記号）  墓痕（転用硯など）  漆痕  スス

2. 遺物写真（図版 16～19）の縮尺は、遺物実測図の縮尺と対応する。

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡周辺の環境	2
第Ⅲ章 調査の方法と経過	3
第Ⅳ章 調査の成果	5
第Ⅴ章 自然科学分析	9
第Ⅵ章 まとめ	14
参考文献	

挿図目次

第1図 遺跡の位置	1
第2図 周辺の遺跡	2
第3図 調査対象地・グリッド設定図・基本層序	4
第4図 各地点の模式柱状図及び試料採取位置	9
第5図 主要珪藻化石群集	12
第6図 主要花粉化石群集	13
第7図 珀藻化石写真	15
第8図 花粉化石写真	15

表目次

第1表 珀藻分析結果	11
第2表 花粉分析結果	13
第3表 遺物観察表	17

図版目次

- 図版1 遺構分割図（1）
- 図版2 遺構分割図（2）
- 図版3 遺構分割図（3）
- 図版4 遺構個別図（1）
- 図版5 遺構個別図（2）
- 図版6 遺構個別図（3）
- 図版7 遺物実測図（1）
- 図版8 遺物実測図（2）
- 図版9 遺物実測図（3）
- 図版10 遺物実測図（4）
- 図版11 遺物実測図（5）
- 図版12 調査写真（1）
- 図版13 調査写真（2）
- 図版14 調査写真（3）
- 図版15 調査写真（4）
- 図版16 遺物写真（1）
- 図版17 遺物写真（2）
- 図版18 遺物写真（3）
- 図版19 遺物写真（4）

第Ⅰ章 調査に至る経緯

平成 16 年 4 月、長岡市農林部（以下「市農林部」という。）から長岡市教育委員会（以下「市教委」という。）に、富島町におけるほ場整備事業計画地内の埋蔵文化財の有無についての問合せがあった。計画地は「八丁沖」と呼ばれる低湿地だった地域にあたり、計画地内に周知の遺跡は所在していなかった。しかし、市内においても沖積地における遺跡の確認例が増えつつあり、分布調査を実施した。その結果、盲田遺跡を含む 7 遺跡を新たに発見した。市教委は、ほ場整備事業の主体者である新潟県長岡地域振興局農林振興部（以下「事業者」という。）及び市農林部に調査結果を伝えた。協議の結果、平成 17 年の稲刈り後に 7 遺跡の確認調査を実施することで合意した。

平成 17 年 10 月の確認調査により、盲田遺跡では土坑、柱穴などの遺構や 9 世紀の須恵器、土師器が出土した（市教委 2006）。平成 17 年度の調査では遺跡の北端を決めることができなかつたため、翌年度に追加の確認調査を行つた（市教委 2007）。

事業者は、調査結果を受けて埋蔵文化財に影響を与える範囲を減らすよう設計内容の調整を行つた。その設計内容を基に市教委と事業者は協議を行い、盲田遺跡については、用水路及び排水路部分を本発掘調査対象地とすることで合意した。ほ場整備事業は平成 20 年 4 月に正式採択された。事業に伴い 4 遺跡（浅田遺跡、五百利遺跡、抜間遺跡、盲田遺跡）の発掘調査が必要であり、各遺跡の発掘調査実施年度については、ほ場整備の進捗と随時調整することとなつた。平成 24 年冬、盲田遺跡周辺での着工が平成 25 年度中となる見込みとなり、発掘調査を平成 25 年度に、翌年度に整理作業及び報告書の刊行を行うこととなつた。

市教委は、平成 25 年 10 月 29 日付け長教博第 280 号で県教育委員会教育長に対し文化財保護法第 99 条第 1 項の規定による発掘調査の着手を報告し、本発掘調査を開始した。



第 1 図 遺跡の位置 (1/50,000)

第II章 遺跡周辺の環境

1 遺跡の位置

盲田遺跡は、新潟県長岡市富島町に所在する（第2図1）。

長岡市域のほぼ中央を信濃川が南から北へと流れ、その両岸には沖積平野が広がる。右岸沖積地の東側に東山丘陵が南北に延びる。東山丘陵から信濃川へ沖積地を横切るように太田川、栖吉川などの中小河川が流れ、山麓から沖積地にかけて谷口扇状地を形成している。沖積地は中小河川などからの氾濫水や雪解け水などが湛水しやすく、かつては広大な湿地や潟が存在していた。遺跡が所在する富島町は、かつて「八丁神（八町潟）」と呼ばれた低湿地の南端に位置し、現在の富島集落は自然堤防上に位置する。盲田遺跡は富島集落の北方向約600m、福島町集落の南東の水田中に所在しており、周辺の標高は16m前後である。

2 周辺の遺跡

信濃川右岸においては、東山丘陵沿いの段丘上や台地上、扇状地などに遺跡が多く分布する。近年は沖積地における遺跡の確認例も増えてきているが、丘陵沿いに比べるとその分布は希薄である。

縄文時代には茨崎遺跡（第2図2）や堂ヶ峯遺跡（3）など、丘陵裾や段丘上、扇状地に遺跡が分布する。弥生時代では後期の遺跡が確認されており、環濠集落である横山遺跡（4）、墳丘墓が確認された藤ヶ森遺跡（5）などが丘陵裾に、五百刈遺跡（6）が沖積地に所在する。古墳時代になると、丘陵上に麻生田古墳群（7）、七ツ塚古墳群（8）が造営され、沖積地内に五斗田遺跡（9）、長表遺跡（10）などの集落が営まれるが、それらの集落が古墳造営に関わる集団のものかは明らかではない。

古代には丘陵裾や低位段丘上、沖積地内に集落が営まれる。間野窯跡（11）などの8世紀代の須恵器窯跡が東山丘陵沿いに複数所在するが、奈良時代の集落遺跡は少ない。平安時代になると、大原C遺跡（12）など丘陵裾の集落や、火焚面遺跡（13）、五百刈遺跡、抜間遺跡（14）など沖積地内の集落が所在する。

富島館跡（15）は、堀や土塁を持つ戦国時代の館跡と推測されるが、宅地化により詳細は不明である。



第2図 周辺の遺跡 (1/75,000)

第III章 調査の方法と経過

1 調査区の設定

確認調査の結果を基に、排水路が敷設される箇所の幅 2.9m、延長 320m を調査対象地とした。

グリッドの設定は、世界測地系の座標軸を基準とする。基準線に沿って 10m×10m の大グリッドを設定し、さらに、1 つの大グリッドを 2 m×2 m の 25 区画に分割した小グリッドを設定した。大グリッド名は X 軸では南から算用数字 1～29、Y 軸では西からアルファベット A～X を用いて両者の組み合わせで「5G」のように表した。小グリッドは 1～25 の算用数字で表し、各大グリッドの南西角を 1、北東隅を 25 として「5G25」のように大グリッド名の後ろに付して呼称する。遺物の取上げ位置、遺構の位置を表す場合、このグリッドを使用する。なお、大グリッドの主な杭の座標軸は以下のとおりである。

0 A 1 (X=164000.000 Y=34300.000) 11K 1 (X=164110.000 Y=34400.000)

2 調査の経過

遺跡の深度が浅いため、調査用の重機が往来することによる遺跡への影響を防ぐための仮設道路を調査地に隣接して設けることとした。平成 25 年 10 月 22 日、盛土用の山砂、敷設板の搬入、仮設道路整備を開始し、順次、調査機材などの搬入を行った。31 日に調査区の北東端から重機により表土剥ぎを開始し、11 月 11 日に表土掘削が終了した。グリッド杭の打設を 11 月 5 日から行った。

6 日から作業員が入り、排水用開渠の掘削など調査環境の整備を行い、7 日、調査区北東端から包含層掘削を開始した。調査区の北東部分では遺物の出土がほとんどなく、また、開渠やサブトレレンチなどからしまりのない土が深くまで続くことがうかがえ、遺跡が広がる可能性は低いと見られた。19 日からは包含層掘削と平行して遺構検出の作業を行った。遺構発掘は 12 月 1 日から開始した。25 日にラジコンヘリによる空中写真撮影を実施し、1 月 16 日に自然科学分析のための土壤採取を行った。22 日に遺構掘削を終了し、翌 23 日に測量を終了して現地における調査を完了した。

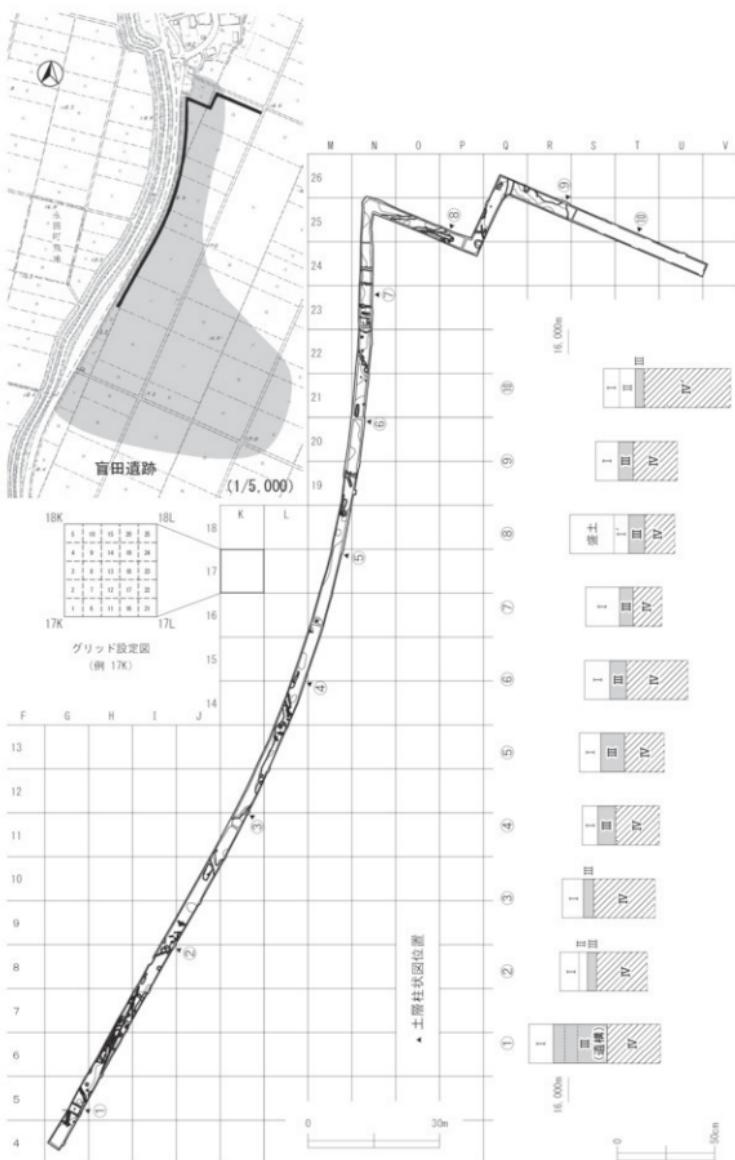
3 基本層序

調査地の現状は水田であり、標高は 16m 前後である。素掘りの用水路が調査地を縦断または横断する箇所がある。基本層序は I～IV 層に区分できる。I 層：暗褐色粘土（水田耕作土）、II 層：青灰色～暗灰色粘土、III 層：暗灰色～灰褐色シルト～粘土（平安時代の遺物包含層）、IV 層：灰褐色または青灰色シルト～粘土（地山）である。調査地の北東部にあたる 24V～25T 付近は III 層とした層の直下から黄褐色～青灰色シルト～粘土や暗灰色～暗褐色粘土が堆積するが土にしまりがない。

4 工事立会

平成 26 年 5 月、用水路及び排水路の敷設位置が一部変更されることとなった。新たな掘削幅が 1 m 未満であることから、工事立会をすることとなった。

平成 26 年 6 月 17・18 日に工事立会を行った。掘削範囲は本発掘調査地の東側または南側の隣接地の延長約 100m であり、大グリッドでは 18N から 25Q までに収まる。掘削により出土した遺物を回収するとともに、本発掘調査において出土した井戸（SE01）、溝状遺構（SD09）の調査区外にあたる部分を確認し、また、土坑と見られる落込み 3 基を確認して工事立会を終了した。



第3図 調査対象地・グリッド設定図・基本層序

第IV章 調査の成果

1 遺構

今回の調査では、井戸（SE）3基、土坑（SK）32基（平成26年度の工事立会確認分を加えると35基）、溝状遺構（SD）32基、ピット（P）45基、その他の遺構（SI）20基を確認した。柱穴が複数並んだ状態で検出された箇所もあるが、掘立柱建物跡の復元には至らなかった。主な遺構について述べる。

(1) 井戸

SE01 24P25・25P21に所在する。平面は円形で、調査時は長径（南北）1.80m、短径（東西）1.40mであったが、翌年度の工事において調査区の東側が拡張され、工事立会の結果、東西方向の径が2.10mであることを確認した。深さは0.84m、断面は台形状を呈する。須恵器、土師器、木製品、錢貨（神功開宝・隆平永宝）を出土した。錢貨は上層の炭化物を非常に多く含む層から、木製品は下層から出土した。

SE02 8I13・18に所在する。平面は円形で東側部分が調査区外に続く。長径1.0m、短径0.65m、深さ0.56mを測る。断面は箱形である。須恵器、土師器、木製品を出土した。覆土の多くは腐植物を多量に含む黒色・黒褐色土（シルト、シルト質粘土質土）である。

SE03 5H3・4に所在する。平面は円形で東側部分が調査区外に続く。断面は漏斗状を呈する。長径1.43m、短径0.64m、深さは0.98mである。須恵器、土師器、木製品を出土する。

(2) 土坑

SK11 22N10に所在する。平面は円形で、長径0.54m、短径0.52m、深さ0.24mを測る。断面は台形である。須恵器を出土している。

SK13 22N16に所在する。平面は円形で、西側部分が排水用開渠により切られる。確認された規模は、長径1.04m、短径0.76m、深さ0.23m。須恵器を出土している。

SK17 18M19・20・24・25に所在。平面はやや不整形な円形で、長径1.38m、短径1.27m、深さ0.41mを測る。断面は半円形を呈する。須恵器、土師器、木製品を出土している。SK16に切られる。

SK32 6H13・14に所在する。平面は長径1.06m、短径0.60mの楕円形を呈する。深さは0.24m、断面はV字状である。須恵器、土師器を出土する。

(3) 溝状遺構

SD02 25P23・24・25Q3・4に所在し、西側部分が調査区外に続く。断面はU字状を呈する。確認した規模は、長さ2.28m、幅0.48m、深さ0.43mである。土師器を出土した。

SD14 19M23・24に所在する。西側部分が調査区外に続く。断面は弧状である。確認した規模は、長さ3.79m、幅1.64m、深さ0.25m。土師器、漆塗り木製品を出土した。

SD17 14L15・20に所在。西側部分が調査区外に続く。確認した規模は長さ1.74m、幅0.74m、深さ0.19mで、断面は弧状である。SD16に切られる。須恵器、土師器、被熱した礫を出土している。

SD22 7I4・5・9・10に所在する。東側部分が調査区外に続く。断面は台形状。確認した規模は長さ1.80m、幅0.74m、深さ0.23mを測る。SD23に切られる。須恵器、土師器、木製品を出土。

SD23 7I3・4・9・10に所在する。東側部分が調査区外に続く。確認した規模は、長さ5.44m、幅0.68m、深さ0.11m。須恵器、土師器、木製品を出土した。SD22を切り、P32に切られる。

(4) ピット

P13 21N7に所在する。平面は長径0.24m、短径0.18mの円形である。断面は台形で、深さ0.09mを

測る。用途不明の漆塗り木製品を出土した。

P32 13L10・15・14L6・11に所在する。平面は長径0.88m、短径0.82mの円形で、断面は漏斗状を呈する。深さ0.41m。柱根を残す。土師器を出土した。

P32 7I3に所在する。長径0.38m、短径0.30mの円形の平面である。断面は漏斗状。深さは0.30mを測る。須恵器を出土した。SD23を切る。

P35 7H17に所在する。SX15内にあり、SX14が近接する。長径0.34m、短径0.28mの円形の平面、深さは0.30mを測り、断面はU字状である。ピットの径とほぼ同じ径の柱根を残す。

(5) その他の遺構

平面や断面が不整形を呈する遺構が多く確認されている。遺物を含まないものや、近世以降の陶磁器片を出土する遺構(SX07、SX08など)もある。

SX05 14L12・14・17・18に所在する。平面は不整形で、西側部分が調査区外に続く。確認した規模は、長さ3.54m、幅1.46m、深さ0.36mである。須恵器、土師器を出土した。

SX14 7H17に所在する。平面は不整形で、西側部分が調査区外に続く。確認した規模は、長さ1.53m、幅0.74m、深さ0.30mである。須恵器、土師器を出土した。SX15の広がりの中に所在する。

SX15 7H16・17・21・22に所在する。平面は不整形、西側部分が調査区外に続く確認した規模は、長さ2.5m、幅1.66m、深さ0.19m。断面は弧状を呈する。遺構の広がりの中にSX14、P35が所在する。須恵器、土師器を出土する。

2 遺物

平安時代の須恵器、土師器のほか、柱根、その他木製品、石製品、鐵治関連遺物、帶金具、錢貨が出土した。このほかに、近世以降の陶磁器片がごく少量出土している。

(1) 須恵器・土師器

須恵器がコンテナ(内寸543×343×104mm)詰めで6箱、土師器は7箱出土した。遺物は小片のものが多く、復元、図化に至らないものが多い。須恵器には墨書・漆書があるものや、墨痕のあるもの、漆が付着したものがある。土師器では内面黒色処理を施したもののがごく少量含まれる。

SE01 須恵器の無台坏(1・2)、甕(3~5)、土師器の長甕(6~9)、小甕(10)が出土した。1は口縁が大きく開く。2は口縁部にススが付着する。1・2は小泊産。3~5は胴部片で、3は外面が平行タタキ、内面が同心円當て具と平行當て具を用い、4・5は外面に平行タタキ、内面に同心円當て具痕が残る。6は口縁端部が上方につまみ上げられ、受け口状となっている。7は非ロクロ成形で、内面外面ともハケ調整される。8・9は胴部片である。10は小甕の底部。平底であり、回転糸切り未調整である。

SE02 11は須恵器の無台坏で、坏部下半にめぐるように墨痕がある。12は土師器の無台碗で、内面外面とともにヘラミガヤが施される。13~15は土師器の長甕である。13・14は「く」の字状に外反する口縁部であり、端部はつまみ上げられる。15は胴部片で、當て具の同心円の溝が摩耗または円形當て具と見られる。16は土師器の小甕である。胴部はやや球形で、底部は平底、回転糸切り未調整である。

SE03 須恵器では無台坏(17)、土師器では長甕(18・19)を出土した。いずれも小片である。

SK17 須恵器では無台坏(20・21)、甕(22)、坏(23)、土師器では小甕の底部(24)を出土する。21は口縁部をわずかに内側に屈曲させる。坏身外面に墨書がある。22は甕の肩部であるが、焼き歪みが大きい。23は残存部で深さが5.8cmと深い身を持つ。21・23は小泊産である。

SK11 須恵器の坏蓋 (25) は小片であるが口縁部が下方にしっかりと折れる。小泊産と見られる。無台坏 (26・27) には墨書きがあり、26 の文字は判読できないが、27 は「石」である。

SK30 28 は土師器楕である。29・30 は土師器長楕であり、29 は口縁端部が内側に屈曲する。30 は体部片であるが、タタキ目はなくロクロ目のみ確認できる。

SD22 須恵器長頸瓶 (31)、土師器の長甕 (32・33・35)、小甕 (34) が出土した。31 は口縁端部をつまみ上げる。32 は頸部でタタキ目はない。33 は胴部破片である。35 は底部近くの資料で丸底となる。

SD23 須恵器の無台坏 (36)、有台楕 (37)、土師器の長甕 (38)、小甕 (39) が出土した。37 の高台の断面は台形で、外端接地である。38 の外面は平行タタキ目が残るが、内面は全て具痕は見られない。

SK13 40 は須恵器の坏蓋で、つまみは扁平で中がくぼむ。41・42 は須恵器の無台坏であり、42 の底部外面に墨書きがあるが、判読はできない。

SK01 須恵器の甕 (43)、横瓶 (44) の胴部片が出土した。いずれも外面は平行タタキ目、内面は同心円当て具痕を残す。44 は小泊産である。

SD17 須恵器の坏蓋 (45)、無台坏 (46)、長頸瓶 (47)、甕 (48)、土師器の無台楕 (49～53) が出土した。45 は口縁端部が内側に屈曲し、外面に墨痕がある。47 は口縁端部をつまみ上げる。48 は甕口縁部で大形である。49・50 は体部がやや直線的に開き、51～53 は体部が丸みを帯びて立ち上がる。

SK32 土師器無台楕 (54) の底部が出土した。

SD02 55 は土師器の長甕口縁部で、端部をつまみ上げており、受け口状になると見られる。

SD08 56 は土師器の鍋で、口縁部が「く」の字状に外反し、断面が三角形を呈する。

SD14 口縁が直線的に開く楕 (57)、長甕の胴部片 (58・59) が出土している。59 は薄手である。

SD26 土師器の鍋 (60)、小甕 (61)、長甕 (62) が出土。60 は体部外面にカキ目、下部にヘラケズリを施す。61 は口縁部が「く」の字状に外反し、端部をつまみ上げる。

P23 土師器の楕 (63)、長甕 (64) が出土している。64 は体部片で外面にカキ目を施す。

P18 須恵器の無台坏 (65)、甕 (66)、土師器の無台坏 (67) が出土した。65 は口縁部にススが付着する。66 は頸部破片である。67 は体部が丸みを帯びて立ち上がる。

SX05 須恵器の無台坏 (68～70)、甕 (71・72・74)、煮または瓶 (73)、土師器の楕 (75)、鍋 (76・77)、無台坏 (78)、小甕 (79)、長甕 (80) が、出土した。70 は小泊産と見られ、底部外面におそらく「王」となる諱書がある。71 は甕類の口縁部、72・74 は甕の胴部片である。73 は胴部片で内外面にカキ目が見られる。72・73 は小泊産である。76 は口縁が緩やかに「く」の字状に屈曲する。77 は口縁端部をつまみ上げる。79 は直線的な体部から口縁が緩やかに屈曲する。80 は体部片でやや薄手である。

SK01 土師器の小甕 (81) が出土した。口縁部の屈曲から端部までが短い。

SK17 82 は土師器の甕で、口縁端部が上方につまみ上げられ、口縁内面にススが付着する。

SK15 須恵器の無台坏 (83) が出土した。体部が大きく開く。

SK07 84 は土師器の無台楕で、内外面ともにヘラミガキを施す。85 は土師器の小甕である。

SK16 土師器の楕 (86)、長甕の体部片 (87～89) が出土した。86 は丸みを帯びた体部である。87・88 は外面平行タタキ目、内面平行当て具痕、89 は外面平行タタキ目、内面同心円当て具痕を残す。

遺構外出土 須恵器では坏蓋 (90・91)、有台坏 (92～95)、無台坏 (96～104)、煮 (105・112・113)、小煮 (106)、長頸瓶 (107)、甕 (108～111)、横瓶 (114) が出土している。90 は扁平な宝珠形のつまみを持ち、口縁部が下方にしっかりと折れる。91 のつまみは扁平な円形で中がくぼんでおり、中央がやや突起する。90・91 ともに内面

が硯として利用されている。92の坏部は緩く内湾して立ち上がり、上部で外反し、口縁端部をつまみ上げる。坏外面の下部に墨痕がある。93は直線的に立ち上がる深身の坏部を持ち、高台の断面は台形である。94は深身の坏部を持ち、底部外面に「王」の漆書がある。95は底部片であるが、底部外面に「×」のヘラ書きがある。無台坏は、96は坏部があまり開かないが、97～104は坏部が開く。100～103には墨書または漆書がある。100は底部外面に「王」の墨書、101は底部内面に漆書があるが、判読できない。102は底部外面に「王」の漆書と墨痕がある。103の底部外面の墨書は判読できない。104は内面を転用硯として用いる。105は壺の口縁部片であり、外面に1条の沈線がめぐらし、口縁端部はつままれて外方に伸びる。106は小形の壺であり肩部に1条の沈線がめぐらし、成形時に偶然ついたものである可能性がある。107は口縁部片で口縁端部を上方と外側につまむ。108は甕の頸部片で外面に平行タタキ目、内面に同心円当て具痕が残る。112は体部片、113は底部である。107～114は小泊産と見られる。土師器は無台坏(115・116)、鍋(117)、甕(118)が出土した。119は内面黒色処理の土師器の椀の底部片である。ヘラミガキは行われない。

(2) 木製品

柱根のほかに箸状木製品や用途不明な木製品が出土しており、漆塗りと見られるものもある。

120・121は柱根である。120はP14出土。上部は腐損している。底面はほぼ平らであるが緩やかな山形に傾斜が付けられている。分割材を用いる。123はP35出土。底面に急な角度をつけてあり、さらに一部を突起状にする。分割材を用いる。

122はSE01から出土した笏状木製品である。下部は折損しており、残存長22.2cm、厚さ0.6cm、幅は最大3.8cm、最小3.2cmで下方に向かい幅が狭くなる。上端の両角を斜めに落とし、笏形に仕上げる。

123・124は箸状木製品である。いずれもSE02からの出土である。

125・126は用途不明の木製品である。125は長さ11.5cm、幅2.8cmの柾目の板を用いており、長軸のほぼ中心線上に2箇所、やや外れた位置に1箇所、円形の穴が開けられる。また、長辺の一辺の中心付近に抉りを施す。126は、先端が緩やかに尖っており、槍先のような形をしているが、全体の断面は三又状を呈し、三又のそれぞれの先は溝状の加工がある。先端に近い箇所の同じ高さの3面全てに円形の穴が穿孔される。折損しており、全体の形状・大きさなど不明である。表面に黒漆が塗られていると見られる。

このほかに、蓋と見られる全面黒漆塗りの木製品が1点、SD14から出土している。直径21.0cm、口縁端部が溝状に加工されている。全体の厚みが非常に薄く脆弱であるため、図化できなかった。

(3) 石製品

127は撥形に近い台形を呈する砥石である。表面に漆が付着するが、文字・記号としての判読はできない。石材は凝灰岩である。128は被熱した礫である。礫面側縁の剝離は被熱によると見られる。

(4) 鋳治関連遺物

輪の羽口(129)は5G23出土で、残存で直径6.4cm、長さ7.5cmを測るが、小片に砕けていた。先端に溶融物が付着する。130は5G24から出土したもので、高さ4.0cm、幅4.5cm、厚さ1.1cmの不整形の金属塊であり、鉄滓であろう。同じような不整形の金属塊が4G14、4G15から出土している。

(5) 金属製品

帶金具の丸鞘(131)が4G14において出土した。一部に黒漆と見られる付着物が残る。

神功開宝(132)・隆平永宝(133)が各1点、SE01から出土した。いずれも円形で、中央に正方形の穴が開く。文字は時計回りに配され、裏は無紋である。

第V章 自然科学分析

遺跡における古環境（堆積環境、古植生）の検討を目的として、遺構の埋積物や調査区壁面に認められる堆積物を対象として、珪藻分析・花粉分析を実施した。分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

1 試料

試料は、調査区壁面に確認された基本土層（25R25 北壁、5G22 東壁）と、井戸跡（SE01、SE03）の計4地点より採取した土壤である。各地点の模式柱状図および試料採取位置を図1に示す。

(1) A 地点（25R25 北壁：第3 国土層柱状図⑤）

本地点は、調査区最北に位置する。本地点の堆積層の層厚は、地表面より約 65cm を測る。観察対象とした堆積層の最下部は水没のため確認には至らなかった。観察地点の側方（東側）には、耕作土下部の青灰色シルト～粘土の下位より浅く掘り込まれる遺構が確認される。この遺構覆土は、炭化物が混じる暗褐色～暗褐色シルトからなる。

試料は、上記した遺構覆土等より土壤 3 点（試料番号 1～3）、耕作土より下位の炭化物が混じる（青）灰色シルト～粘土（試料番号 4）と、同堆積物の中～下部（試料番号 5～7）。さらに砂泥互層の最上部（試料番号 8）の土壤 5 点の、計 8 点を採取している。

(2) B 地点（SE01）

本地点は、調査区北側、A 地点の南西に位置する井戸跡埋積物に相当する。埋積物は、泥（シルト～粘土）を基質とし、色調や混入物の状況により複数の層位に分層される。埋積物の層厚は約 83cm を測る。

試料は、井戸跡の機能時～廃絶、および埋没の過程を考慮し、埋積物の上部（試料番号 4）、中部（試料番号 5）、最下部（試料番号 3）より 3 点、さらに有機質あるいは炭化物が多量混じる等の特徴が認められた堆積物（試料番号 2・1）より、土壤 5 点を採取している。なお、試料番号 1 は、黒～黒灰色シルト相当と考えられる、古代の錢が出土した地点より採取した試料である。

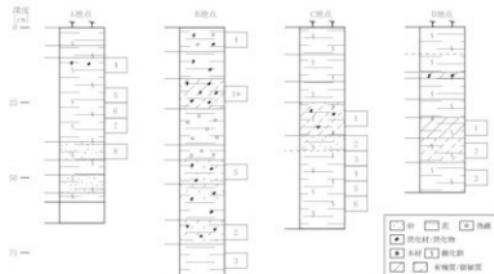
(3) C 地点（5G22 東壁：第3 国土層柱状図①）

本地点は、調査区南半に位置する。本地点に認められた堆積層の深度は約 67cm を測る。堆積層は、大きく現在の耕作土、遺構覆土（調査区内掘削時はⅢ層と認識。平面での遺構確認なし。）、自然堆積物とに分けられる。自然堆積層に相当する堆積層下部は、灰色シルトからなり、上部はやや砂混じりとなる。

試料は、遺構覆土下部（試料番号 1）と、直下の灰色砂混じりシルトおよびその下部より層厚 5cm 連続で採取した土壤 5 点（試料番号 2～6）の、計 6 点を採取している。

(4) D 地点（SE03）

本地点は、調査区南半に位置し、表土（耕作土）直下より掘り込まれる遺構の埋積物が確認される。本地点の堆積層の層厚は



第4図 各地点の模式柱状図および試料採取位置

約 55cm を測る。なお、土壤採取時においては土坑として認識しており、その後発掘未了であることが判明し、さらに発掘したことにより井戸として認識したものである。

試料は、遺構埋積物の中～下部に相当する暗灰色シルトとそれより以深の堆積物より土壤 3 点（試料番号 1～3）を採取している。

今回の分析調査では、以上の（1）～（4）に示した試料より 10 点を選択し、下記の分析に供した。分析対象として選択した試料の内訳は、A 地点が試料番号 4・5・8、B 地点が試料番号 5・2・3、C 地点が試料番号 2・4、D 地点が試料番号 1・3 である。

2 分析方法

（1）珪藻分析

試料を湿重で 5g 前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法（4 時間放置）の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸 600 倍あるいは 1000 倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に 200 個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではないが、全面を走査する）。種の同定は、[原口ほか, 1998]、[Krammer, 1992]、[Krammer & Lange-Bertalot, 1986; 1988; 1991a; 1991b]、[渡辺ほか, 2005]、[小林ほか, 2006] 等を参照し、分類基準は [Round et al., 1990] に、壊れた珪藻殻の計数基準は [柳沢, 2000] に従う。

（2）花粉分析

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、簡別、重液（臭化亜鉛、比重 2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトトリス（無水酢酸 9: 濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、パリノ・サーヴェイ株式会社保有の現生標本や [島倉, 1973]、[中村, 1980a] 等を参考にする。

3 結果

（1）珪藻分析

結果を表 1、図 2 に示す。珪藻化石の産出頻度は、A 地点の 3 試料（試料番号 4・5・8）と C 地点の試料番号 4 が少なかったが、それ以外の 6 試料からは、堆積環境を検討する上では有意な数量の珪藻化石が産出する。珪藻化石の保存状態は、A 地点では全体的に悪いが、その他の試料では全体的に良好である。産出分類群数は、合計で 44 種 117 分類群である。

1) A 地点

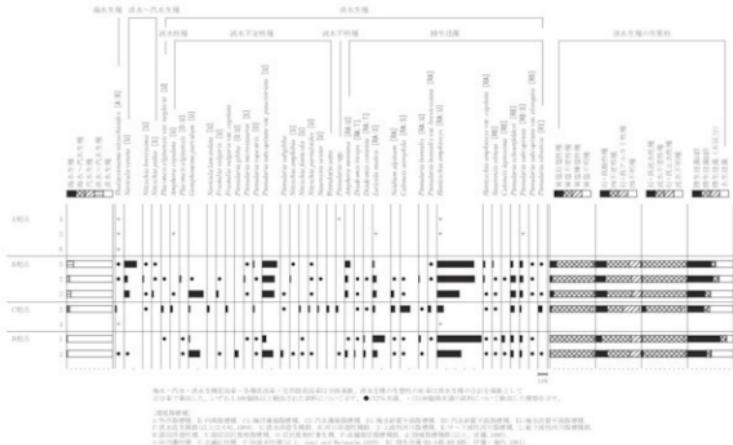
試料番号 4・5・8 のいずれも珪藻化石が非常に少なく、海水生種の破片、陸生珪藻、それに淡水生種の破片が少量産出する程度である。

2) B 地点

試料番号 2・5 は、ともに陸上のコケや土壤表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻が多産することで特徴づけられる。試料番号 3 は、試料番号 2・5 とほぼ同様な産状を示すが、

第1圖 1 表 建築分析結果(1)

第1表 珪藻分析結果(2)



第5図 主要珪藻化石群集

流水不透性で付着性の *Gomphonema parvulum* が特徴的に多産する点で異なる。

3) C 地点

試料番号4は、海水生種、流水性種、陸生珪藻が、わずかに認められる程度である。

珪藻が産出する試料番号2は、陸生珪藻と水生珪藻とがほぼ同率で産出する。

4) D 地点

試料番号3は、陸生珪藻と水生珪藻とがほぼ同率で産出する。群集的には、B 地点の試料番号3に近似している。試料番号1は、陸生珪藻が全体の約 84.2% を占める。

(2) 花粉分析

結果を表2、図3に示す。A地点の試料番号8、C地点の試料番号4は花粉化石の産状が悪かったが、それ以外の試料からは花粉化石が多く産出する。化石の保存状態は、全体的に悪い～非常に悪いものが多く認められる。

1) A 地点

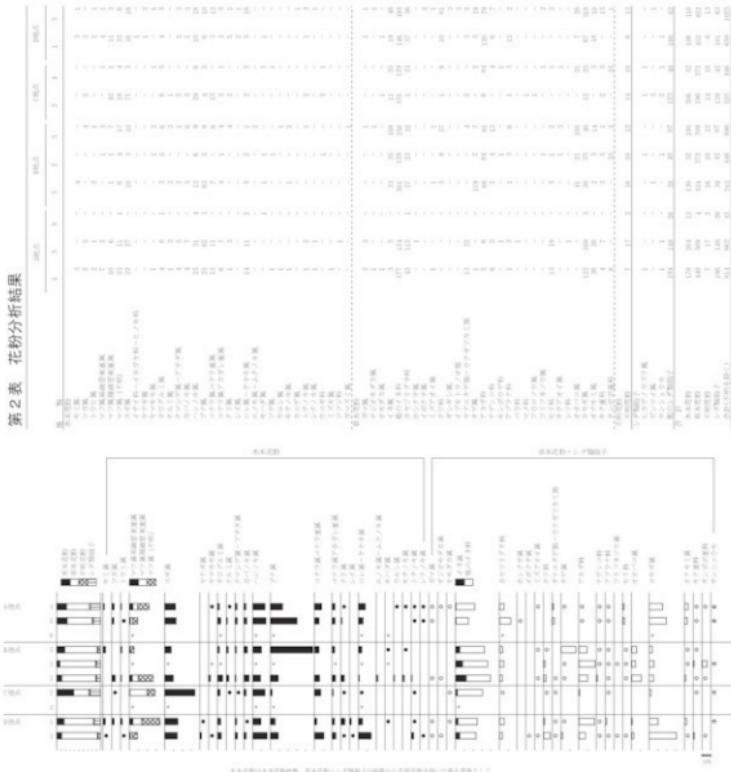
試料番号8は検出される花粉化石が少なく、木本花粉ではマツ属、サワグルミ属、ハンノキ属など、草本花粉ではカヤツリグサ科、ヨモギ属が、数個体検出される程度である。

試料番号5・4は、花粉化石群集が類似し、草本花粉の割合が高い。多産したイネ科には、栽培種であるイネ属も確認された。ただし、花粉表面が溶解しているものが多く、明らかイネ属と同定できる個体は少ない。イネ科全体に占めるイネ属の割合は、試料番号5が約 3.9%、試料番号4は約 1.7%である。粒径や形状からイネ属の可能性がある個体も確認されたが、保存状態が悪く表面構造が観察できなかったものは他のイネ科に含めている。

2) B 地点

いざれの試料からも花粉化石が富んで産出し、草本花粉が優占する。木本花粉の産出状況は試料により異なり、試料番号3・5は、からうじて定量解析ができる程度の産出に留まり、試料番号2ではそれに満たない。試料番号3ではマツ属が最も多く産出し、試料番号5ではブナ属が最も多く産出する。

第2表 花粉分析結果



第6図 主要花粉化石群集

草本花粉はいずれもイネ科が多産し、試料番号5ではタブノイチジク属の多産が顕著である。また、水湿地生草本・シダ類も、僅かに認められる。なお、多産したイネ科には栽培種のイネ属が認められ、イネ科全体に占めるイネ属の割合は、試料番号5が約30.2%、試料番号3が約21.3%、試料番号2が約14.1%である。

3) C地点

試料番号4は花粉化石の産状が悪く、わずかにマツ属、スギ属、ハンノキ属、ブナ属、ニレ属-ケヤキ属等の木本花粉、イネ科等の草本花粉が認められる程度である。

試料番号2は花粉が豊富に産出し、木本花粉と草本花粉がほぼ同程度の出現率を示す。木本花粉ではマツ属とスギ属が多く、草本花粉はイネ科が優占する。イネ科全体に占めるイネ属の割合は約6.8%である。

4) D地点

試料番号3・1のいずれも花粉化石が豊富に産出するが、いずれも草本花粉が優占し、木本花粉はからうじて定量解析が行える程度の産出である。

草本花粉は、試料番号3ではイネ科、ヨモギ属が多産し、カヤツリグサ科、クワ科等を作う。試料番号

1ではイネ科が多く産出し、カヤツリグサ科、クワ科等を伴う。なお、イネ科全体におけるイネ属の割合は、試料番号3が約19.1%、試料番号1が約11.5%である。本地点でも、上位層の方が割合がやや低い。

4 考察

(1) 堆積環境

A地点では、珪藻化石そのものの产出に乏しく、堆積環境を珪藻化石の生態的特徴から検討することは困難であった。ただし、少ないながらも産出する珪藻化石は、海水性種、淡水生種、陸生珪藻と多岐に渡っている。生育環境の異なる種類が混在することから、氾濫性の堆積物である可能性がある。同じく、C地点の試料番号2も、陸生珪藻と水生珪藻とが混在し、海水生種等も認められるほか、顆粒に多産する種類が認められないことから、混合群集であるといえる。水生珪藻の中には、流水性種も低率ながら含まれ、少なくとも試料番号2採取層準は河川の氾濫等により堆積したと考えられる。以上のことから、本遺跡の基本土層（A地点、C地点）は、いずれも氾濫堆積物を主体として構成されている可能性が高い。

一方、井戸跡のB地点では、陸生珪藻が多産する。井戸の内壁や周囲の乾いた場所等からの陸生珪藻を多く含む土壌が供給されたと考えられる。また、水生珪藻も比較的に多く産出したことから水の存在が示唆される。主要種の生態的特徴から、水質的には富栄養化していた可能性がある。

D地点の試料番号3は、群集がB地点の試料番号3に近似する。周囲から陸生珪藻を多く含む土壌が流れ込む崖地のような場所で、富栄養な水の影響を受けながら堆積した可能性がある。試料番号1では、陸生珪藻の割合が高く、当初は水の影響があったが、埋積の過程で乾燥する状態が多くなったと考えられる。

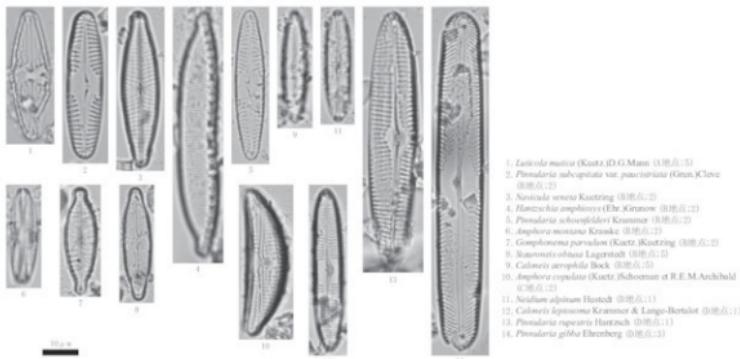
(2) 古植生

分析の対象とした基本土層や遺構埋積物からは、ほとんどの試料から花粉化石が検出されたもの、保存状態が悪く、花粉外膜が破損・溶解しているものが全体的に多く認められた。上記した珪藻分析結果から推定される環境を考慮すると、得られた花粉化石群集は経年変化による分解・消失の影響を受けており、分解に強い花粉等が選択的に多く残されている可能性がある。

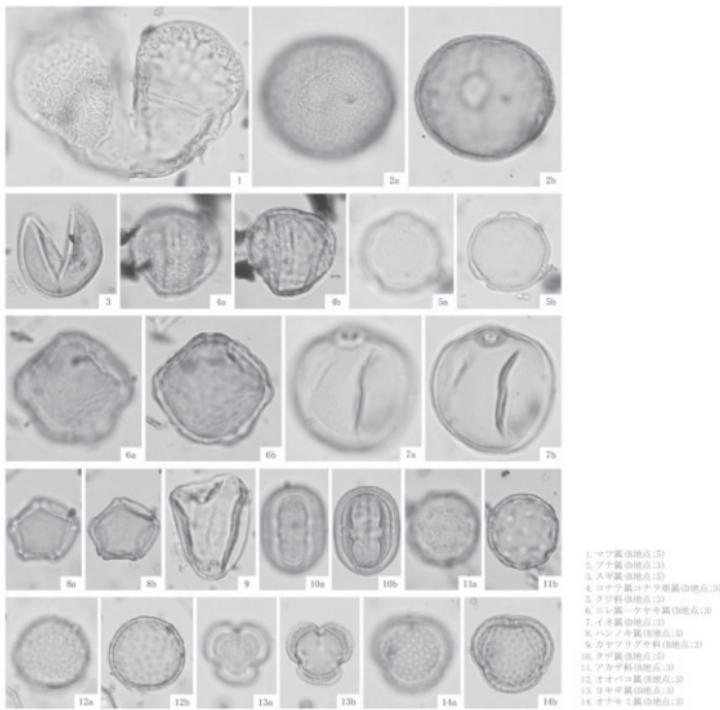
いずれの地点においても、草本類が多産あるいは優占し、木本類の出現率が低い。木本類の組成は、試料により優占する種類は異なるものの、多産する種類は概ね類似する。ブナ属やコナラ亜属は、冷温帶性落葉広葉樹林の主要構成要素であり、後背の山地や丘陵等の森林に由来すると考えられる。ハンノキ属、ヤナギ属などは、渓谷沿いや河畔などの適湿地を好む種群であり、集水域の谷沿いや遺跡周辺の河畔等に認められた林分を反映していると考えられる。スギ属も河畔や低湿地等に生育した可能性がある。マツ属は、生育環境の適応範囲が広く、極端な陽樹であり、二次林等として周間に分布した可能性がある。

一方、前述したように、今回の分析に供した試料はいずれも草本花粉の出現率が高率となる。いずれも、開けた明るい場所に群落を形成する種群であり、その他にも同様の生育環境を示すものが多い。周辺に分布した草地環境を反映していると考えられる。また、水湿地生草本、水生シダ類も検出された。これらは、周辺に分布した水湿地、あるいは遺構の埋積過程の凹地内に一時に生育していた可能性がある。

なお、今回の調査では、各地点より栽培種のイネ属が確認された。イネ属の割合は、A・C地点では2~7%と低率であるが、B地点試料が14~30%、D地点試料が12~19%とA・C地点のそれを上回り、遺構埋土により高率となるという特徴が指摘できる。また、いずれの地点においても、今回の計数からは除外した粒径や形状ではイネ属の可能性がある個体が認められており、それらを加えるとイネ属の割合はより高率になると思われる。



第7図 硅藻化石写真



第8図 花粉化石写真

1. *Lasiola malica* (Kutz.) D.G.Mann (3地点: 5)
2. *Pinnularia subcapitata* var. *pasciutiana* (Grun.) Cleve (8地点: 2)
3. *Amphora senaria* Kutzinger (5地点: 2)
4. *Hausmannia oblonga* (Ehr.) Kutzinger (8地点: 2)
5. *Pinnularia schoenfeldiana* Krause (8地点: 2)
6. *Amphora monstrosa* Krause (8地点: 2)
7. *Gomphonema parvulum* (Kutz.) Kuetzing (8地点: 2)
8. *Solenostrea uliginosa* Legrand (8地点: 2)
9. *Cyclotella striata* (Ehr.) Grun. (8地点: 2)
10. *Amphora cupulata* (Kutz.) Schaeffer et R.E.M.Archibald (C地点: 2)
11. *Nodularia alpinum* Hustedt (8地点: 1)
12. *Colomeris leptosoma* Kraemer & Longo-Bordet (8地点: 1)
13. *Pinnularia rupestris* Hartmann (8地点: 1)
14. *Pinnularia gibba* Ehrenberg (8地点: 1)

第VI章　まとめ

今回の調査では、土坑・溝状遺構・ピット・柱根を残すピット・性格不明遺構などが出土した。柱穴列を確認したが、掘立柱建物跡を復元するには至らなかった。堅穴住居跡なども確認されていない。

遺物では、9世紀後半から10世紀初頭と見られる須恵器・土師器が出土しており、墨書・漆書土器や転用硯が複数確認されている。また、包含層から金属製の帶金具・井戸跡からは神功開宝・隆平永宝を出土しており、いわゆる農村集落とは異なる様相を示すと言える。

盲田遺跡周辺は、かつて存在した「八丁沖」と呼ばれる低湿地の南西端に位置しており、対岸である北側には見附市上田遺跡が所在する。上田遺跡は9世紀後半の遺跡であり、多量の墨書・漆書土器、木簡、多量の大甕などを出土した。今回の調査により、9世紀後半ごろ、八丁沖を挟んだ北岸と南岸において、墨書・漆書土器を出土するような集落が存在したことが明らかとなった。

一方、出土した神功開宝・隆平永宝は、鑄造・発行年が天平神護元(765)年、延暦15(796)年であり、金属製の帶金具やこれらの錢貨は伝世したものと考えられる。しかし、市内の信濃川右岸地域においては8世紀の須恵器窯跡が複数確認されているが集落などの様相は明らかではなく、帶金具や錢貨がもたらされた背景も不明である。盲田遺跡の時代である平安時代の様相とともに、今後に残された課題である。

参考文献

- 長岡市 1992 『長岡市史』資料編1 考古
長岡市教育委員会 2002 『長岡市内遺跡発掘調査報告書—千代栄町地区—』
長岡市教育委員会 2006 『平成17年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』
長岡市教育委員会 2007 『平成18年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』
長岡市教育委員会 2010 『大原C遺跡』
見附市教育委員会 2005 『上田遺跡』

〈第V章 自然科学分 枠引用文献〉

- 安藤一男 1990 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」 『東北地理』42 73-88頁
Asai, K. & Watanabe, T. 1995 Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom. 10, 35-47.
原口和夫・三友清史・小林 弘 1998 「埼玉の藻類 珪藻類、埼玉県植物誌」 埼玉県教育委員会 527-600頁
伊藤貞永・堀内誠司 1991 「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」 『日本珪藻学誌』 6 23-44頁
小林 弘・出井雅志・真山茂樹・南雲 保・長田啓五 2006 『小林弘珪藻図鑑』 第1巻 株内田老鶴園
小杉正人 1988 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」 『第四紀研究』27 1-20頁
Krammer, K. 1992 PINNULARIA. eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26. J. CRAMER
Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1986 Bacillariophyceae. 1. Teil: Naviculaceae, Suesswasserflora von Mittel europa. Band2/1. Gustav Fischer Verlag
Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1988 Bacillariophyceae. 2. Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae Suesswasser flora von Mittel europa. Band2/2. Gustav Fischer Verlag
Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1991a Bacillariophyceae. 3. Teil: Centrales, Fragilariaeae, Eumotiaceae. Suesswasserflora von Mitteleuropa, Band2/3. Gustav Fischer Verlag
Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1991b Bacillariophyceae. 4. Teil: Achnanthaceae, Kritsche Ergänzungen zu Navicula(Linellatae) und Gomphonema. Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/4. Gustav Fischer Verlag
中村 純 1980a 「日本産花粉の標準 I II (国版)」 『大阪市立自然史博物館収蔵資料目録』第12,13集
Round, F.E., Crawford, R.M. & Mann, D.G. 1990 The diatoms. Biology & morphology of the genera. Cambridge University Press, Cambridge.
島倉巳郎 1973 「日本植物の花粉形態」 『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第5集
渡辺仁治・浅井一視・大塚泰介・辻 彰洋・伯耆晶子 2005 『淡水珪藻生態図鑑』 内田老鶴園
柳沢幸夫 2000 「II-1-3-2-(5) 計数・同定」 『化石の研究法—採集から最新の解析法まで—』 化石研究会 共立出版社 49-50頁

第3表 遺物觀察表

(2) 頸應器・土師器

(3) 木製品

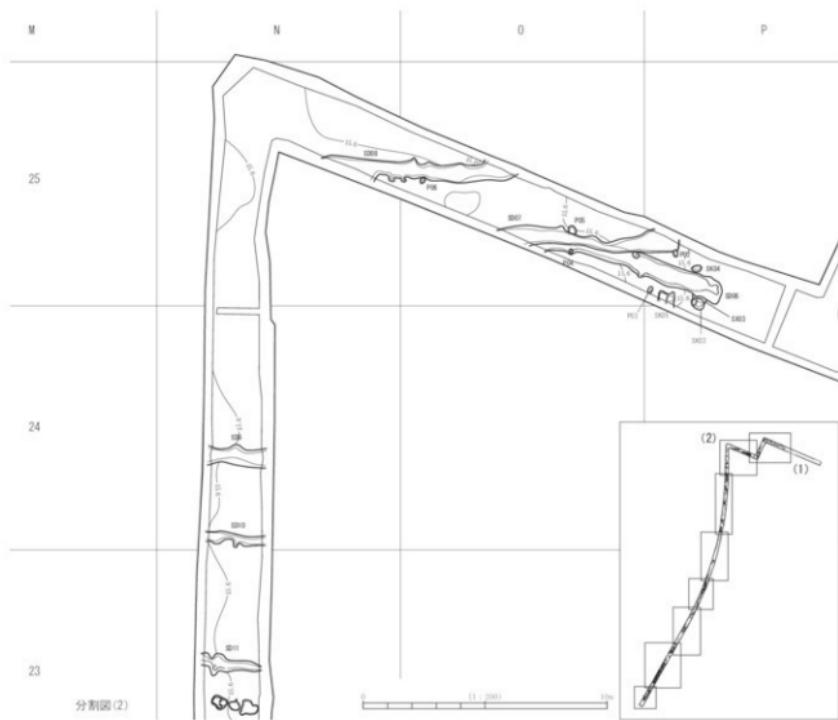
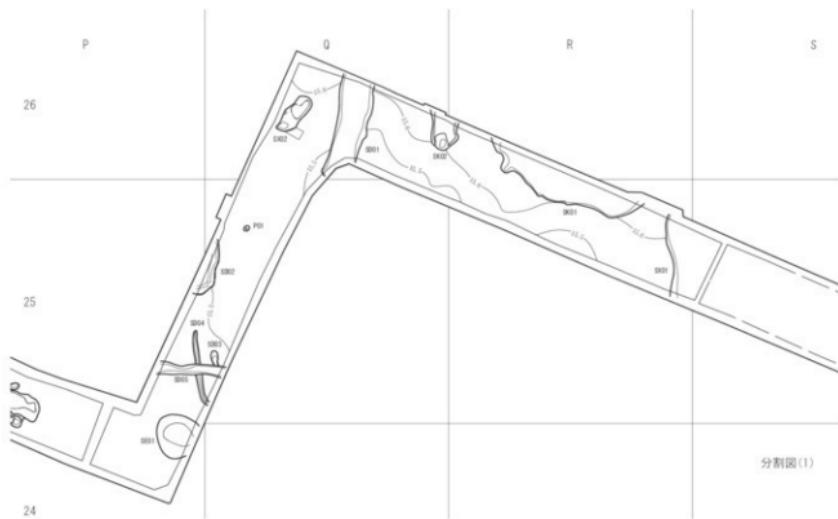
(4) 石製品

(5) 鋼冶関連遺物

(6) 金屬製品

遺構分割図（1）

図版 1



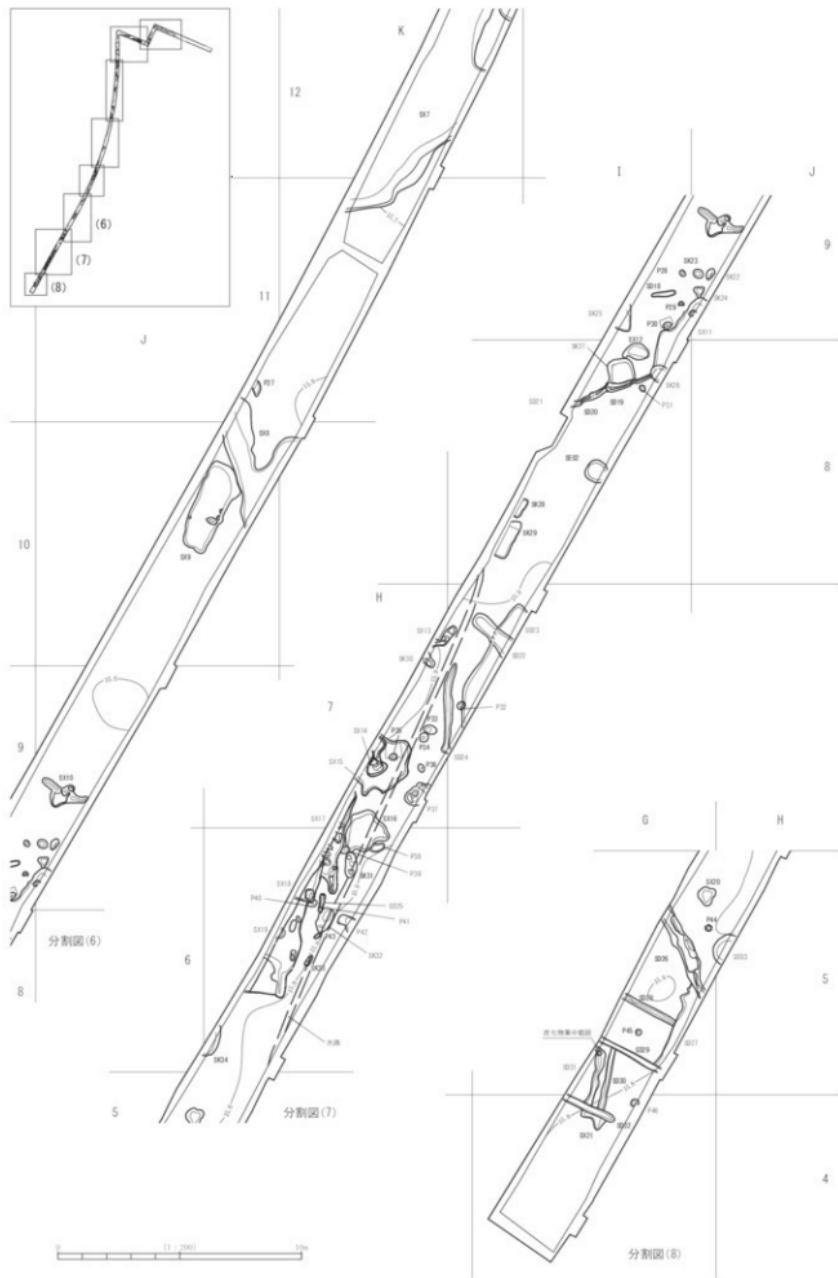
圖版 2

遺構分割図（2）



遺構分割図（3）

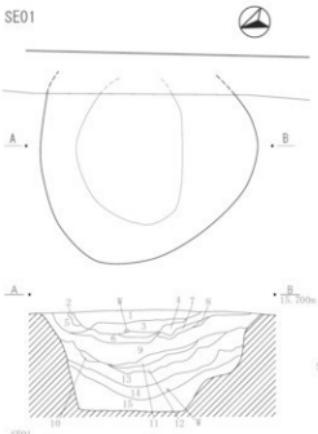
図版 3



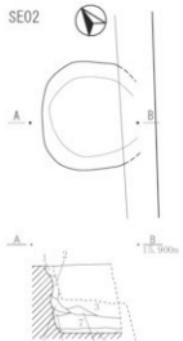
図版 4

遺構個別図 (1)

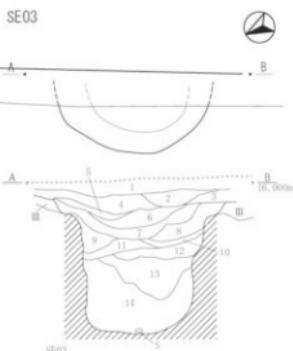
SE01



SE02



SE03



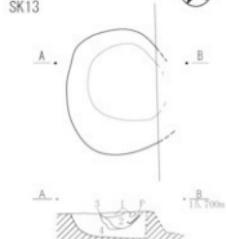
SK01

- 1 黒色粘土・黄灰色粘土・炭化物を含む
- 2 離灰褐色粘土・灰色粘土・黄灰色粘土・炭化物を多く含む
- 3 黄褐色粘土・灰色粘土・炭化物を含む
- 4 黄褐色粘土・明黄色粘土・炭化物を含む
- 5 黑色粘土・離植物と粘土が混在する
- 6 灰褐色粘土・IV層の崩落土
- 7 黑色シルト・人骨が離植物である
- 8 黑褐色シルト・離植物とシルトが混在する
- 9 黑色土・灰褐色粘土・炭化物を含む
- 10 灰色粘土・黑色土・炭化物を多く含む
- 11 灰褐色灰土・炭化物を多く含む
- 12 灰褐色灰土・明黄色粘土・炭化物を含む
- 13 灰褐色灰土・黑色土・炭化物を含む
- 14 灰褐色灰土・植物遺体(木質の腐植したもの)を含む
- 15 灰褐色灰土

SK11



SK13



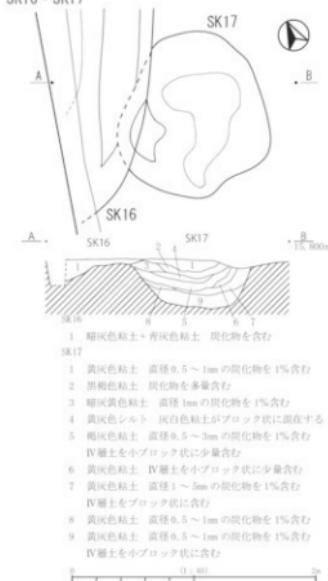
SK32



SK32

- 1 黄灰色粘土・黄褐色粘土・炭化物を含む
- 2 黑褐色粘土・黄褐色粘土・炭化物を含む
- 3 黄褐色粘土・黑色粘土・炭化物を含む
- 4 黄褐色粘土・灰褐色シルト
- 1 黄灰色粘土・直徑0.5~10mの炭化物を5%含む
IV層土を小ブロック状に10%含む
- 2 黄褐色シルト・直徑0.5mの炭化物を1%含む

SK16・SK17



1 黃褐色粘土・直徑0.5~10mの炭化物を5%含む
IV層土を小ブロック状に10%含む
2 黑褐色粘土・炭化物を多量含む
3 灰褐色粘土・直徑1~5mの炭化物を1%含む
4 黄褐色シルト・IV層土をブロック状に混在する
5 黄褐色粘土・直徑0.5~3mの炭化物を1%含む
IV層土を小ブロック状に含む
6 黄褐色粘土・IV層土を小ブロック状に少量含む
7 黑褐色粘土・直徑1~5mの炭化物を1%含む
IV層土をブロック状に含む
8 黄褐色粘土・直徑0.5~1mの炭化物を1%含む
9 黄褐色粘土・直徑0.5~1mの炭化物を1%含む
IV層土を小ブロック状に含む

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

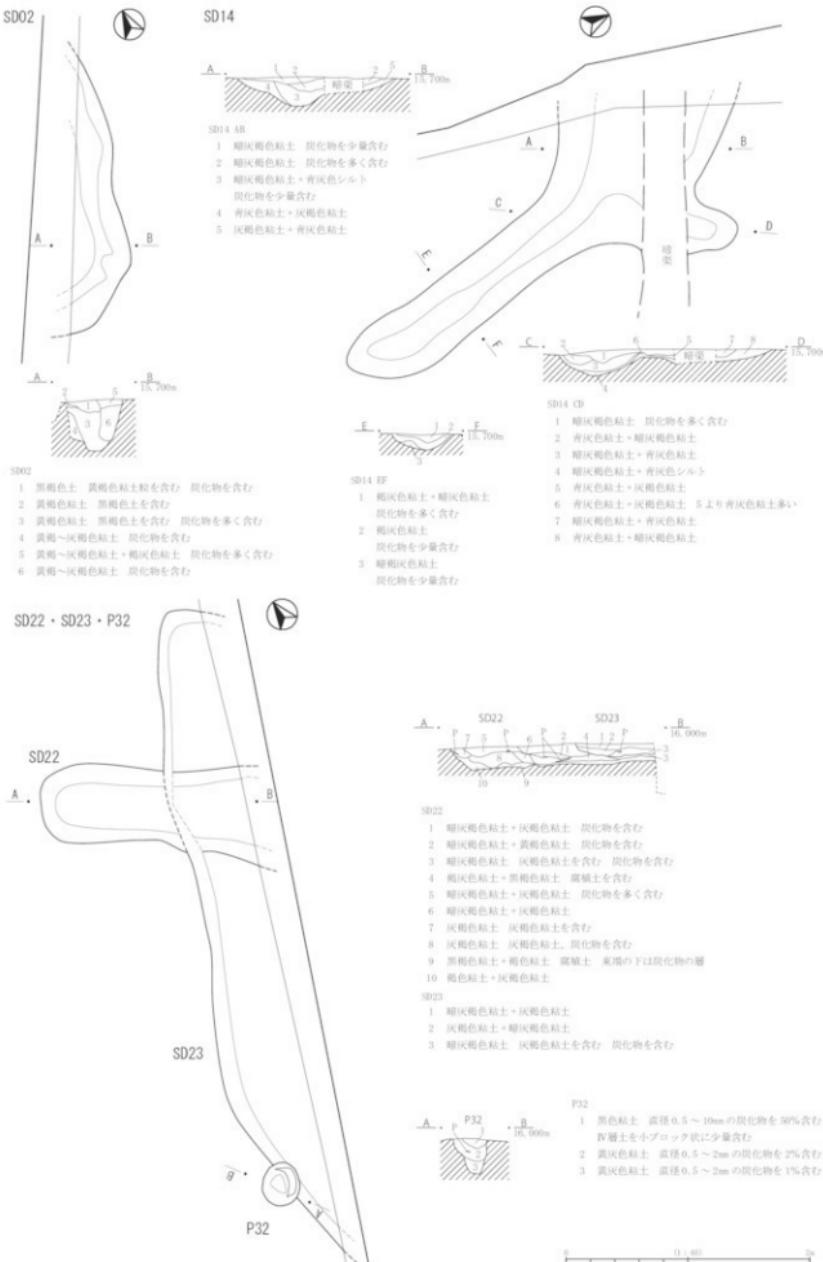
13

14

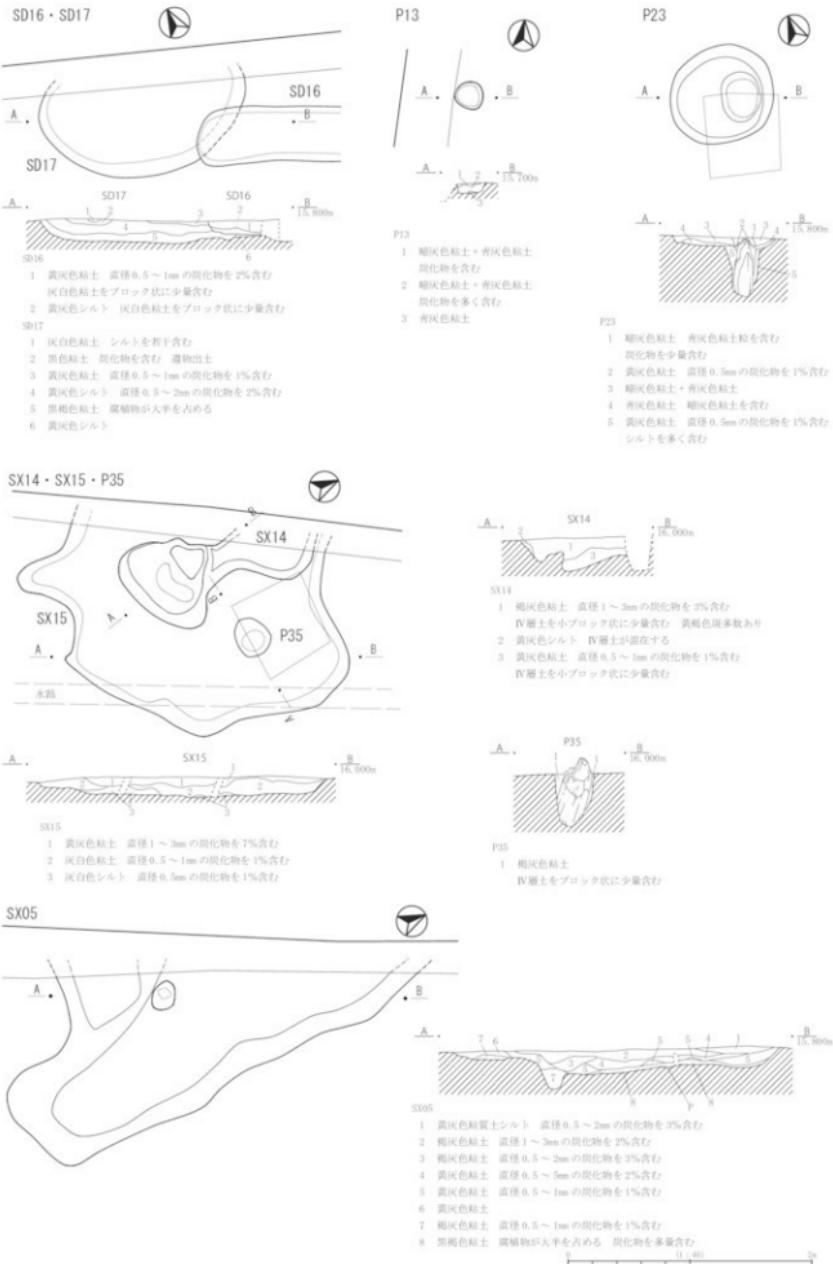
15

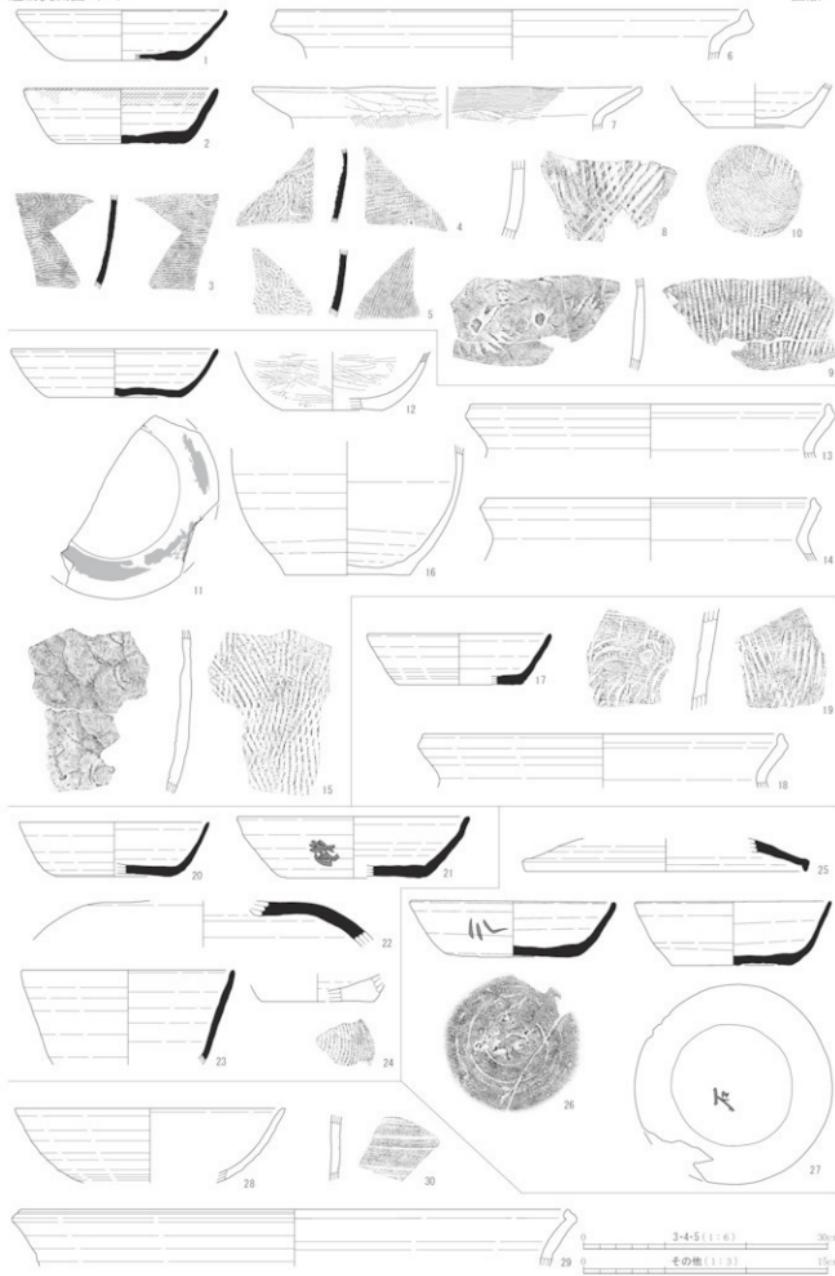
16

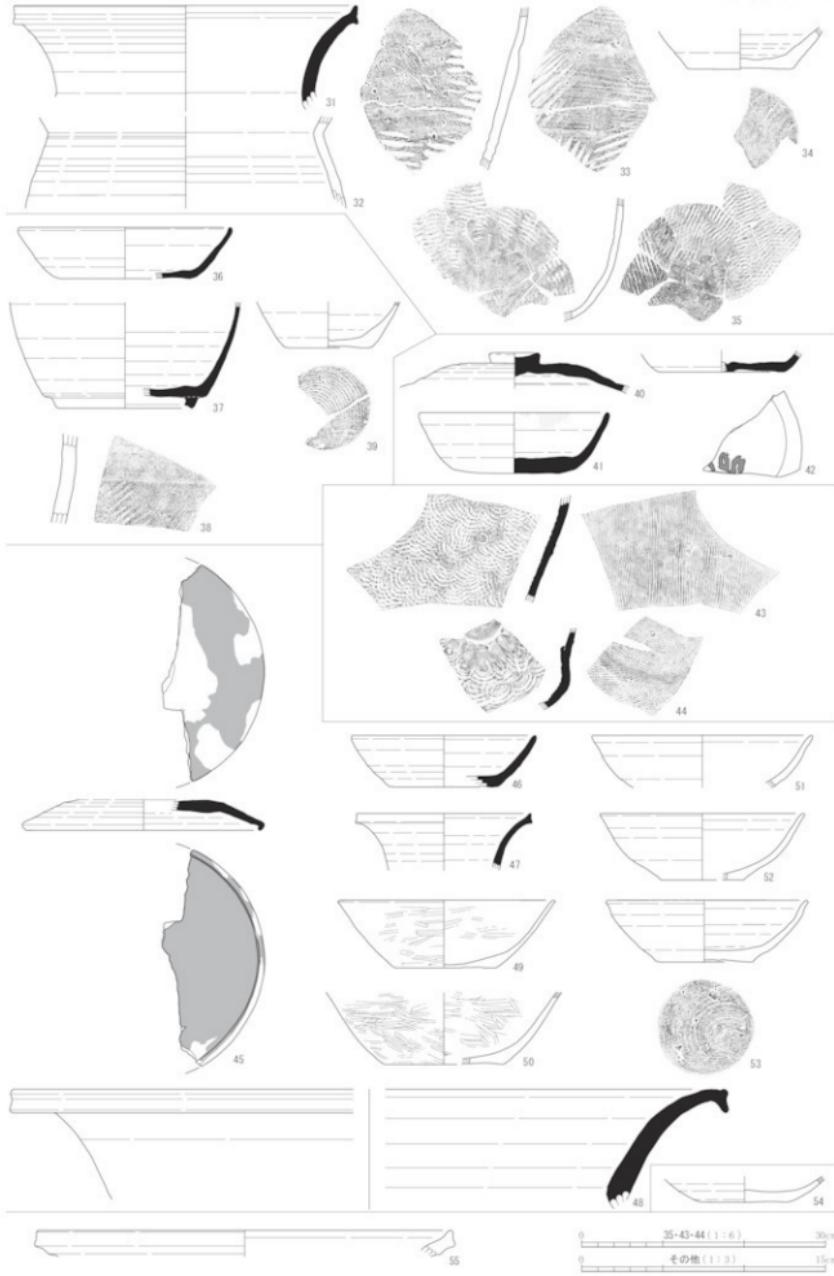
17



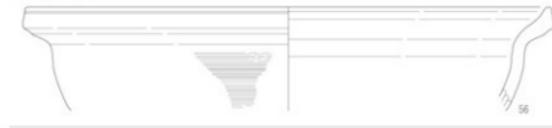
図版6



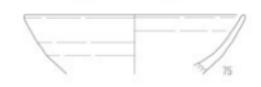
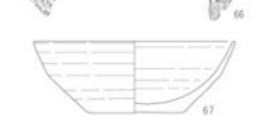
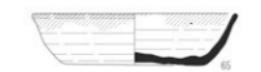


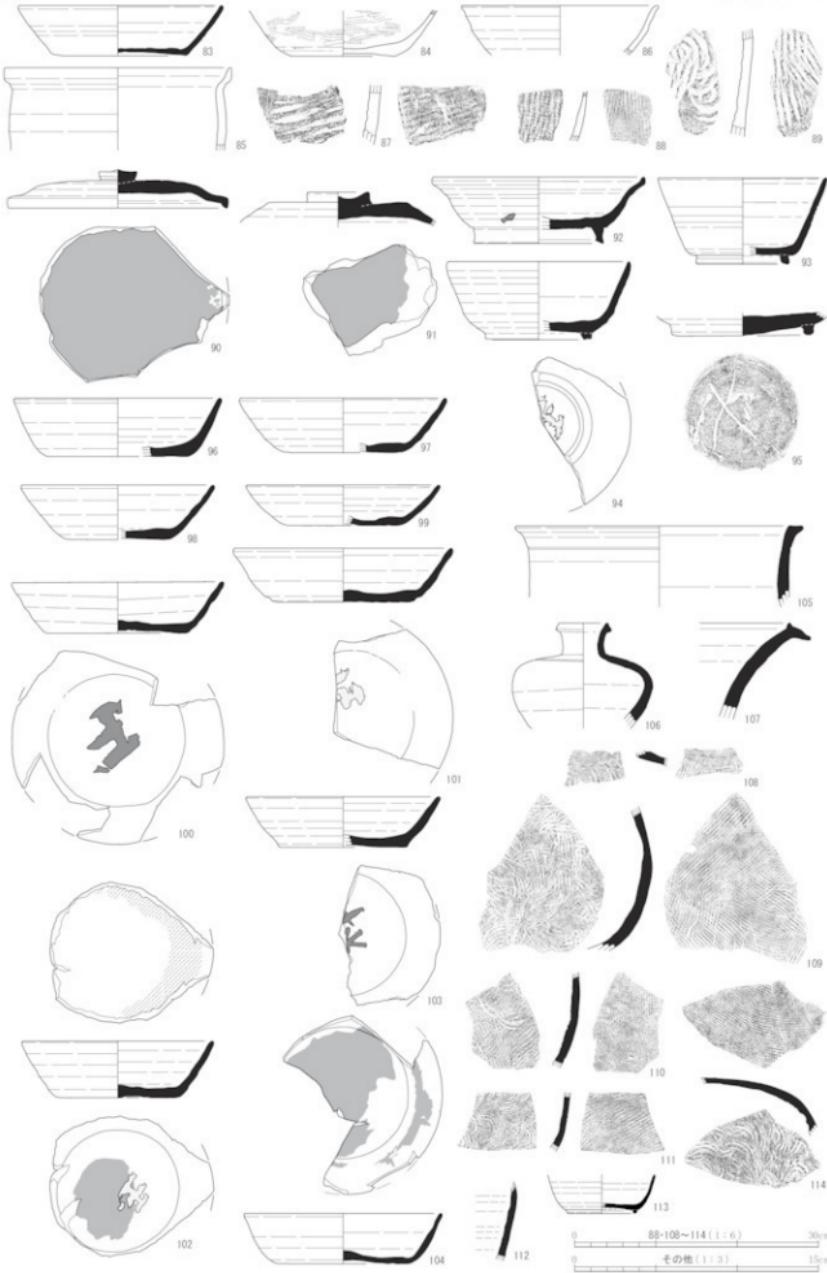


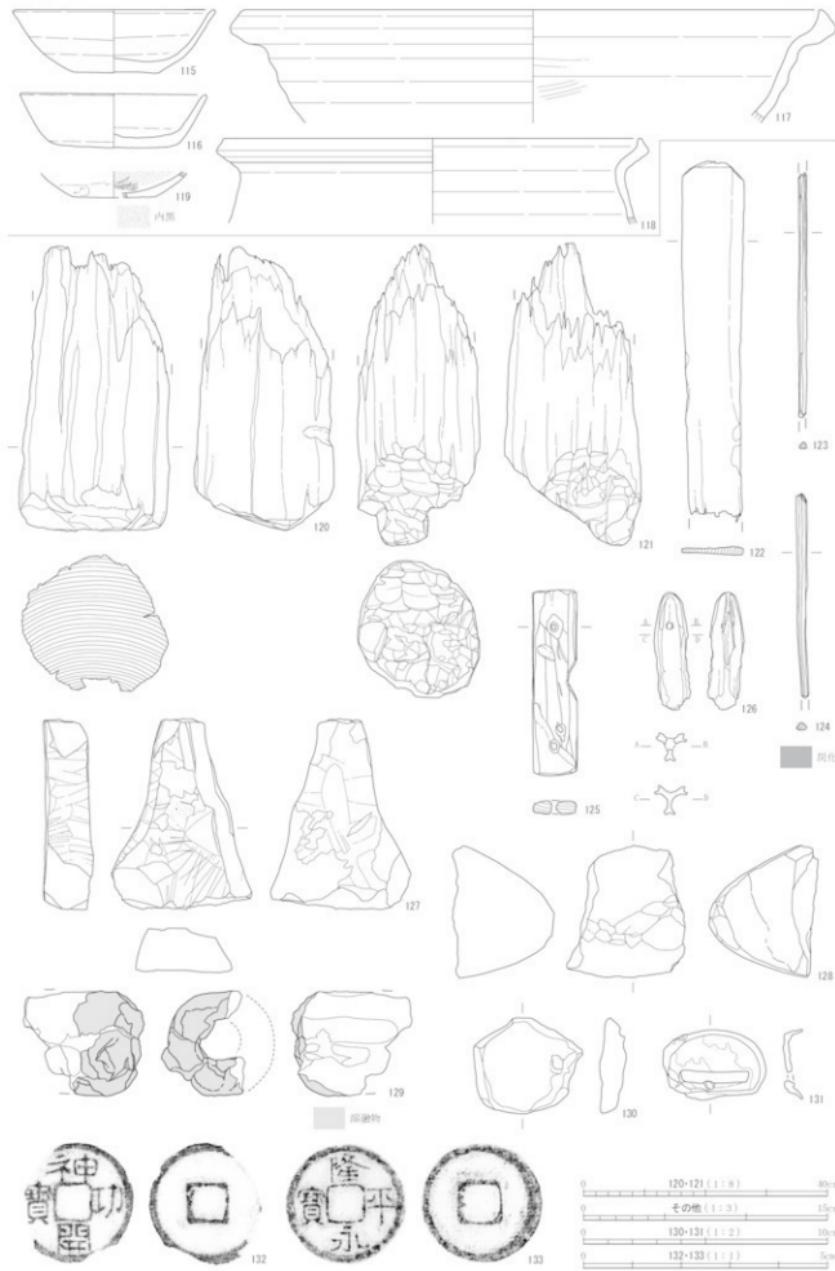
遺物実測図（3）



図版 9









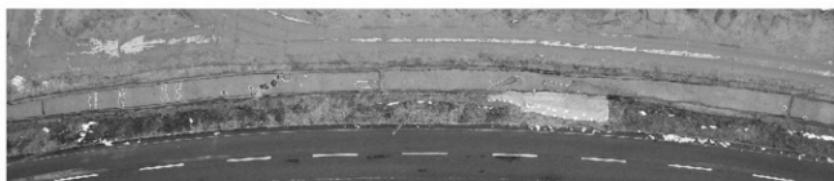
調査地全景（南東から）



空中写真（4G～11J 西から）



空中写真（10J～17M 西から）



空中写真（16M～25N 西から）



空中写真 (24N ～ 25S 南から)



基本層序 (14L 25)



SE01 土師器・須恵器出土状況 (西から)



SE01 セクション (西から)



SE01 古銭・土師器出土状況 (南から)



SE02 木製品出土状況 (南から)



SE02 完掘状況 (西から)



SE03 セクション (西から)

図版14



SK11 遺物出土状況（南から）

調査写真（3）



SK13 セクション（南から）



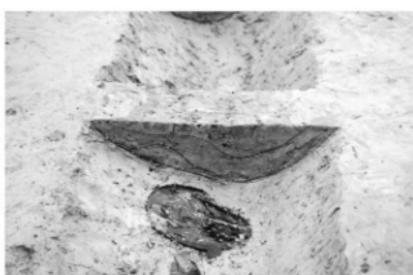
SK17 遺物出土状況（南から）



SK17 セクション（南から）



SK17 完掘状況（南から）



SD14 セクション・塗装製品出土状況（南東から）



SD17 半截・遺物出土状況（東から）



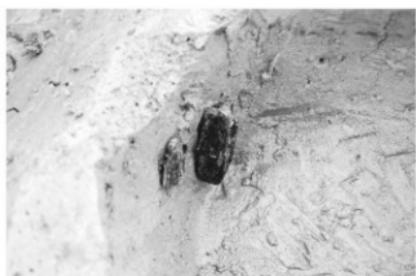
SD17・SD16 セクション（東から）



SD22 遺物出土状況（南から）



SD22 完掘出土状況（南から）



P13 木製品出土状況（北から）



P23 セクション（南から）



P22 セクション（北東から）



SX05 遺物出土状況（東から）

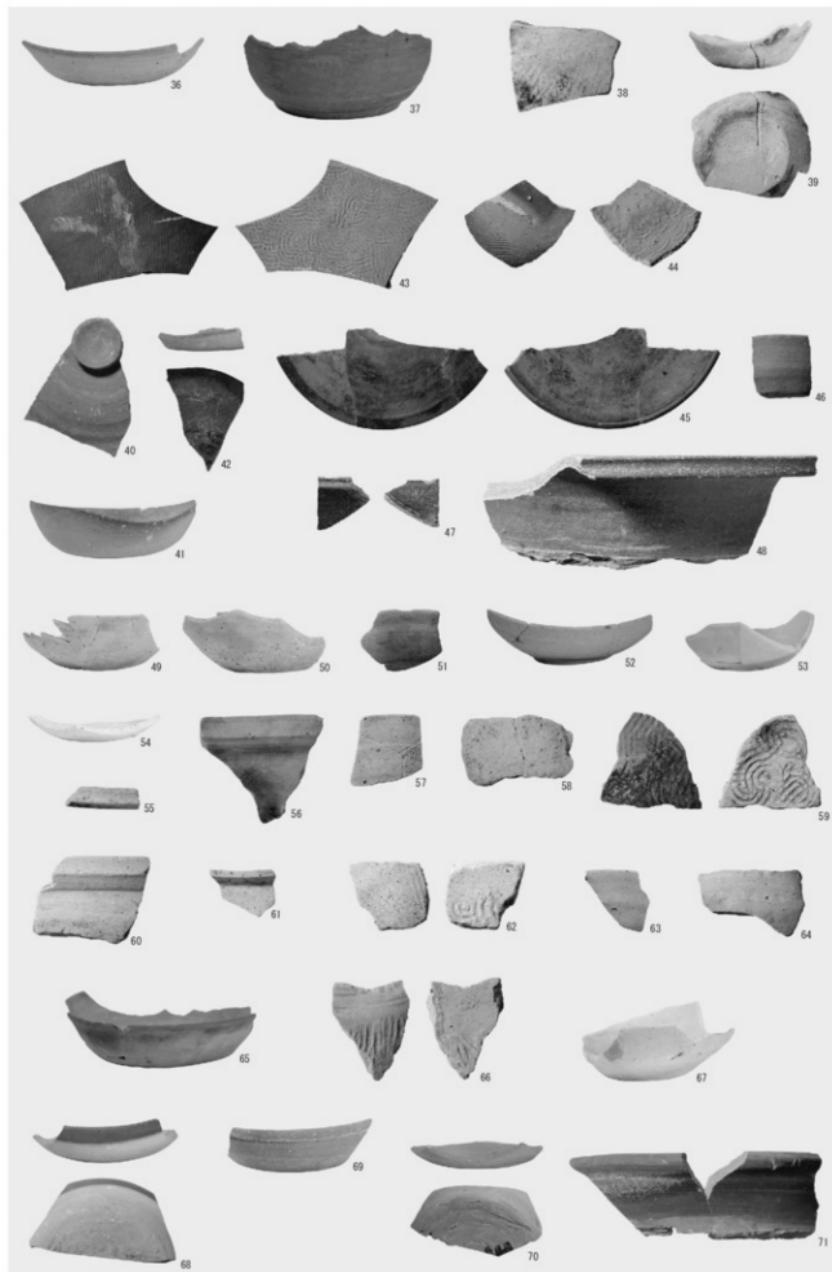


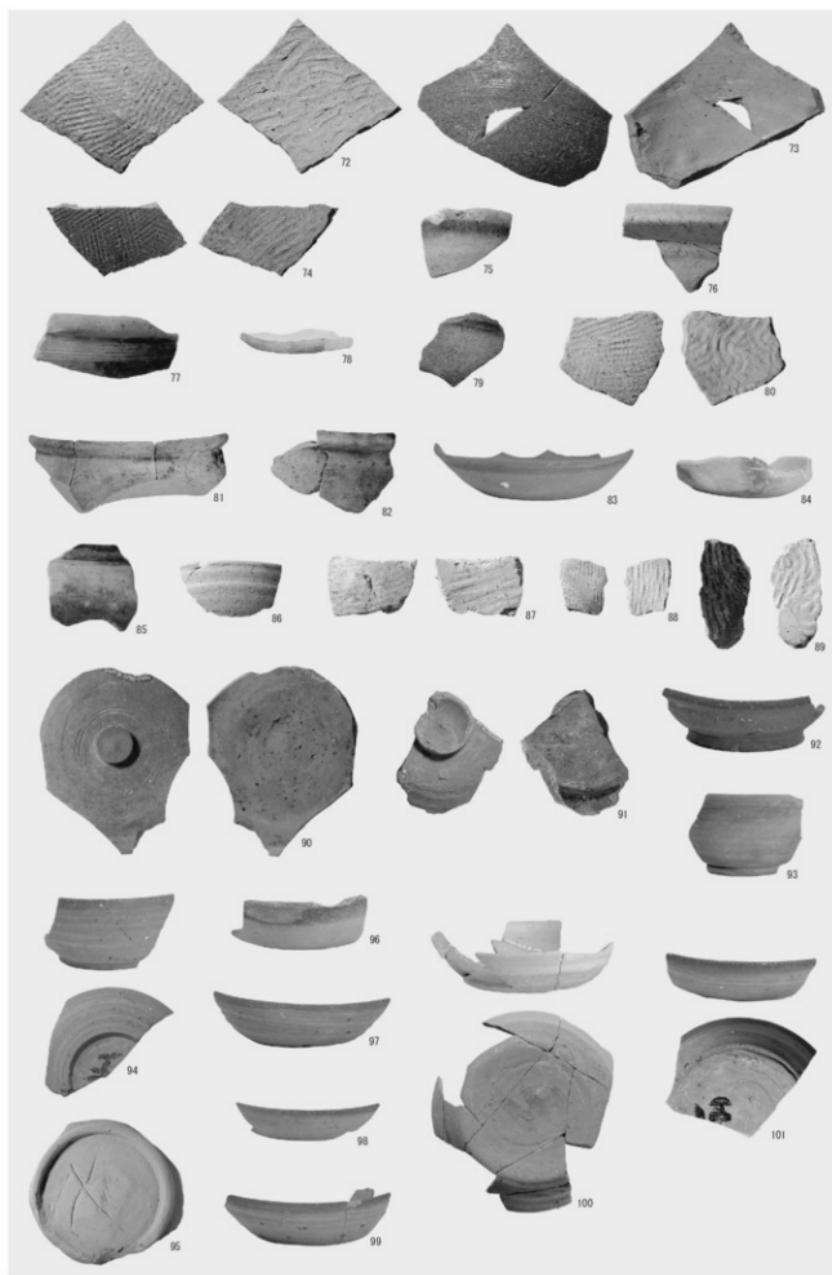
包含層発掘作業

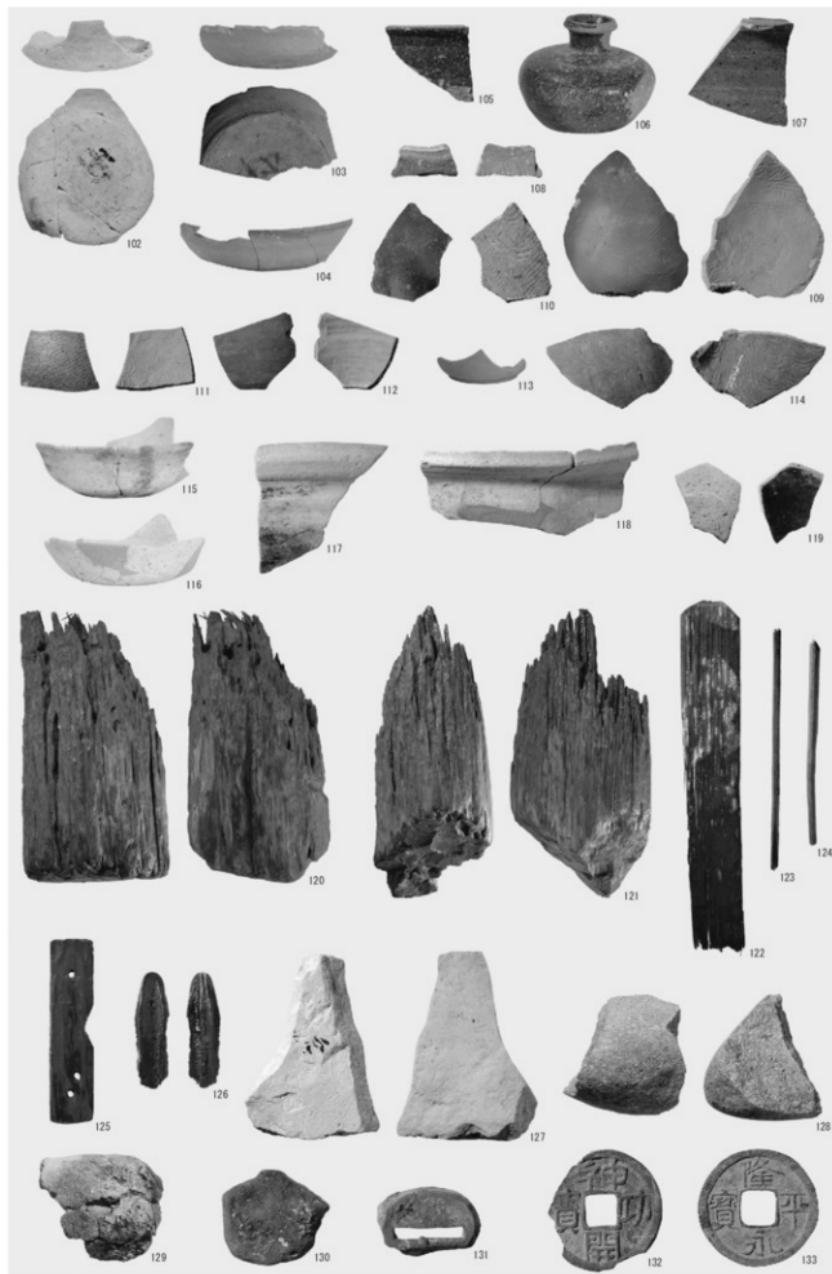


漆塗製品取上げ作業









報告書抄録

ふりがな	めくらだいせき							
書名	盲田遺跡							
副書名	県営経営体育成基盤整備事業（富島地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	鳥居美栄							
編集機関	長岡市教育委員会							
所在地	〒940-0084 新潟県長岡市幸町2丁目1番1号 TEL0258-32-0546							
発行年月日	2015年3月18日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
めくらだいせき 盲田遺跡	新潟県長岡市 富島町字盲田	15201	608	37° 28' 42"	138° 53' 20"	2013.10.31 ~ 2014.01.23	928 m ²	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時期		主な遺構		主な遺物		特記事項
めくらだいせき 盲田遺跡	遺物包含地	平安時代		井戸 土坑 溝状遺構	土師器 須恵器 木製品			神功圓寶・隆平 永宝、幣金具(丸 輪)を出土(旧 長岡市域では初 の出土)

盲田遺跡

県営経営体育成基盤整備事業（富島地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成27（2015）年3月18日 印刷

平成27（2015）年3月18日 発行

編集・発行 長岡市教育委員会

印刷・製本 株式会社文化